

稲作だより

第2号

令和3年4月8日発行
山形おいしさ際立つ！
米づくり日本一プロジェクト
西村山農業技術普及課
TEL：0237-86-8215

【育苗期間中の施肥管理】

- ・基肥施用量は窒素成分で **2g/箱** を基準とします。購入した培土を使用する場合は、保証成分量をよく確認して、苗の種類に応じて適正に追肥しましょう。
※育苗用肥料に緩効性肥料を使用している場合は、追肥の必要はありません。
- ・**稚苗**の場合は、**1.8 葉期**に窒素成分で **1g/箱** 追肥します。
- ・**中苗**の場合は **2.0、3.0 葉期**に窒素成分で **1g/箱** 追肥します。

【浸種】

- ・令和2年は登熟期間が高温で経過したため、種子の休眠が深い可能性があります。
- ・水温 **10℃～15℃**、積算温度（日平均水温×日数）で「**120℃**」を目安に浸種を行いましょう。
- ・浸種開始時の水温が低いと発芽率が低下することがあります。最初の水温は10℃以上15℃未満となるよう徹底しましょう。※水温が15℃を超えると、ばか苗病の発生リスクが高まるので注意。
- ・新種時は2～3日ごとに水を交換し、時々種子袋の上下を入れ替えるなどして、酸素不足や温度ムラにならないよう管理しましょう。定期的に適切な水温が保たれているか温度計で確認しましょう。

【催芽】

- ・30～32℃の温湯に、芽と根が **1mm** 程度出た「ハト胸状態」になるまで浸します。十分に浸種した種籾であれば、約20時間でハト胸状態になります。
- ・出芽揃いを良くするため、**9割以上**の芽切れを確認しましょう。※伸ばしすぎないように注意

【播種】

苗種	乾籾重(g/箱)	葉数	必要箱数	浸種日	催芽日	播種日	育苗日数	田植日(例)
稚苗	150～180	2.5枚	22箱/10a	4月12日	4月24日	4月25日	20～25日	5月20日
中苗	80～120	3.5枚	27箱/10a	4月2日	4月14日	4月15日	30～35日	

- ・田植適期（5/15～20日）から逆算し、適正な時期に播種作業を行いましょう。
- ・苗種に応じて、適正な播種量（乾籾重）と育苗日数を順守しましょう。
※播種量が多すぎると苗が徒長しやすく、育苗日数が長くなると老化苗になりやすいので注意。
- ・播種時の灌水は覆土前に行い、覆土に水が染みってくる程度（約1ℓ/箱）を目安にしましょう。
- ・育苗マットを用いる場合は、2ℓ/箱を目安に多めに灌水しましょう。

【アルミ蒸着シート使用時の注意点】

- ・アルミ蒸着シートを使用する場合は、好天時に播種を行い、苗箱を並べた後、苗床の温度が **20～30℃**となるように日光で温めてからシートを被覆して、シート内の適切な温度を確保しましょう。
- ・さらに保温力を高めたい場合は、アルミ蒸着シートの下に**有孔ポリ**を敷きましょう。

苗箱を並べた後、20～30℃まで温めてからシートを被覆
※32℃を超えると高温障害の発生リスクが高まるので注意



- ・播種後数日が経過しても出芽が遅れている場合は、日中に一度シートを剥がし、苗床の温度が20～30℃となるまで温めてから、再度シートを被覆してシート内の温度を高めましょう!!

【育苗初期の温度管理】

稚 苗		中 苗			
出芽期（2日程度）	温度は30～32℃、芽の長さは1cm程度				
	昼 間	夜 間		昼 間	夜 間
緑化期（3日程度）	20～25℃	10℃以上	出芽期 ～1.5葉期	30℃以下	5℃以上
緑化期以降	15～20℃	5℃以上	1.5葉期以降	15～20℃	5℃以上

【出芽揃いまでの管理】

- ・無加温出芽では、出芽揃い後も被覆を続けると軟弱苗になるので、芽の長さが覆土から**5～10 mm**になったら被覆資材を外しましょう。
- ・加温出芽では、必ず芽の伸びを確かめて育苗器から苗箱を出しましょう（育苗器に入れる目安は2日間）。事故防止のため、温度調節器（サーモスタット）は使用前に必ず点検しましょう。
- ・温度計は2つ準備し、①ハウスに吊り下げて苗の高さに設置、②苗箱の土中に差し込み、苗の近くの実際の温度を確認しましょう。

【土づくり】

- ・毎年継続して土づくり肥料（ケイカル・ようりん等）を施用し、水稻の活力を高めましょう。
- ・**15 cmの耕深**を確保し、根の伸長を促しましょう。

【基肥(速効性肥料)、基肥一発肥料(緩効性肥料)の施用時期】

- ・基肥(速効性肥料)の窒素は、圃場に施用された後、時間の経過とともに流出します。
→ **基肥(速効性肥料)**は、できるだけ代かきの直前に施用しましょう。
- ・一般的な基肥一発肥料(緩効性肥料)は、田植日を施肥日として設計しているため、施肥から田植までの間隔が長くなると、生育後半に窒素が不足する恐れがあります。
→ **基肥一発肥料(緩効性肥料)**は、田植え 10 日前以内の施用を心がけましょう!!

STOP 農作業事故!! 農薬適正使用を徹底!!

⇒ 次号「育苗後期」「本田準備」編は 4 月 22 日発行予定です。